

講演会

微力だけど、無力じゃない。～「ことばのちから」とはなにか～

―国際日本学部・国際文化交流学科言語・メディアコース・ミニシンポジウム―

国際日本学部 国際文化交流学科言語・メディアコース

2022年6月22日に国際日本学部文化交流学科言語・メディアコースのミニシンポジウムとして作家・元長野県知事・元参議院議員・元衆議院議員の田中康夫氏により「微力だけど、無力じゃない。～「ことばのちから」とはなにか～」と題する講演が行われました（主催：神奈川大学人文学会）。みなとみらいキャンパス6009講堂でおこなわれましたが、オンラインで生配信も行われ、その後オンデマンドで教員・職員・学生にも録画した動画を共有しました。

田中康夫氏は、一橋大学在学中に小説『なんと



田中康夫氏（ご本人提供）

なく、クリスタル』で「文藝賞」を受け、以来、作家、評論家として数多くの小説やエッセイを執筆されてきました。政治家として、社会のために活躍しながら数多くのテレビやラジオにも出演されています。

以下に、講演の概要とともに、このミニシンポジウムに参加した学生と教員の感想をいくつか掲載します。

講演の概要

講演の初めに、田中氏は日本の人口減少による社会の変化について述べました。田中氏によると、この変化は「日没」や「日出」のグラデーションのように段階的に進んでいます。この社会の変化の中で、プライベート「私」とパブリック「公」、また身近な「市場」と世界の「市場」とその区別をよく考えるべきであると田中氏は強調しました。グローバルな市場の力によって、使い捨て文化があふれています。その状況の中で、一人ひとりの貢献とローカルコミュニティの貢献それぞれ

の価値の重要性を意識すべきであります。一つの例として、田中氏は長野県の小布施町について論じました。この町は、町の発展のために、公的資金の受領を拒否し、代わりに地元で作られた食品、個人の庭のツアー、文化遺産を利用して、観光客にアピールしています。自分たちの町の個性を守りながら、世界に貢献しています。もう一つの例として、フランスのパン屋の例が語られました。パンのマスマーケティングの脅威を見て、フランスのパン屋が新たな法律の制定を勝ち取りました。その法律によると、パン屋は自分で小麦を選び、自分の店でパンを作って、売らなくてはいいことが決められました。田中氏のメッセージは、グローバル化の中でも、自分のアイデンティティや自分が個人で貢献できることの価値を見失うべきではないと解釈ができます。

学生の感想

大学生になってから対面での講演会に行く機会がほとんどなかったのですが、私は田中さんのお話を

聞くことを楽しみにしていました。今回の講演会の内容としては、消費社会の中では私たちは一人の組織の歯車のようなものであるが無力ではないということなど、様々なことについて学びました。講演会を通して興味深いお話をたくさん聞くことができましたが、その中で特に印象に残った内容がいくつかあります。

田中さんのお話でまず一つ目に印象に残ったことは、100%分り合えないからこそ、ことばでお互いを理解することです。私たちの表情にはどんな感情がまつているのか、どんなあたたかみなどがあるのか、について考えさせられました。特にコロナ禍でマスクを着用するようになり、お互いの顔がみえないなかで言葉でのコミュニケーションが重要なことになりました。私たちの言葉にはものすごい力や影響力があることに気づかされました。

二つ目は「もともとのものいかしている」長野県小布施町の栗の木が歩道が例にあげられたお話です。そこでは「ばか者」「よそ者」「わか者」などのチャレンジをする若者たちの気持ちに寄り添っているコミュニティが成立されているというお話があり、コミュニティをつくり上げることの重要性について学びました。コミュニティというものは重要な社会的つながりであるとともに、お互いのことを支え合う仲間がいるという安心感をもたらす大事なものだと思いました。

→ フランスにおける、パン屋という呼称及び標示(消費法典第1篇第2章第1節第10款)。自分で選んだ原料・自分で捏ねた生地・自分で焼いたパン 3条件を満たす者のみ Boulangerie の看板を掲げられる。1998年制定。(2022年6月22日神奈川県立神奈川大学国際日本学部国際文化交流学言語メディアコース 講演会配布)

三つ目は「自分で考え、自分でやり、自分で語り、自分で動くことの重要性」についての話です。私たちは一人ひとりが社会の中では消費者なので、自分で取る行動は慎重に考えたうえで取る必要があるということ学びました。私は先のことであまり考えずに行動してしまうことがよくあるので、これは積極的に自分の日常生活に取り入れたいと思ったお話でした。

四つ目は、簡単に何かの情報に流されない、そして「自分で考える」ことの重要性についてのお話です。情報収集というものは積極的にできるときに、できる人が、できる限りやる必要があるということを学びました。様々な情報がまわっている現在では、何がそうで何が本当なのか自分で確認する必要があると強く考えます。

今回の講演会では、自分や他人のことを理解することの重要性やコミュニティがあることとは何か、消費社会でどう生きていくのがいいのかなど、様々なことについて学ぶ貴重な機会になりました。これからの大学での学びや、人生に活かせるようにしたいと思いました。

(国際日本学部国際文化交流学科3年・辻愛咲二ナ)

「講演から受け取ったメッセージ言葉の力は生じる力を宿す」

1980年、田中康夫さんが「なんとなくクリスタル」を世に出されました。当時まさに大学生

だった私が受けた衝撃は今でも忘れられません。友人たちで作品の世界観を語り合ったものでした。田中さんはメディアで活躍され、その後、長野県知事として国会議員になられました。現在も作家として、同時に舌鋒鋭い論客としても活躍されています。その田中さんと御縁ができ、大学の講演の依頼をしたところ、快諾をしていただきました。「微力だけど、無力じゃない。『ことばのちから』とはなにか」という講演タイトルを受け取った時から、どのような視点で、何を話されるのかワクワクしていました。

講演は格調高く、そして言語・メディアを考えるにあたってのヒントに満ちたものでした。

国の助成金を頼らず(文化を含めた)地元の資源を使い、まだ地産地消という言葉が広まる以前に街の活性化に成功した長野県小布施市の例を挙げ、「よそ者、ばか者、若者」の発想と解説されました。足元のそこにある資源、その魅力にいかにか気付くか。それは異文化からの眼差しやよそ(外)からの眼差しが必要である、つまり多様な視点は足し算ではなく掛け算に成り得るという可能性を気づかせてくれました。

そして、フランスで制定された「パン屋という呼称及び標示」の話には、思わず膝を打ちました。自分で選んだ原料・自分で捏ねた生地・自分で焼いたパンという3条件を満たす者のみ Boulangerie の看板を掲げられる法令を、パン屋

さん達自身が勝ちとったというのです。重要なことは、「自分」で目利きをして（考え、自信をもって選び）「自ら」動くという点です。

これは、メディアとの接し方にも繋がると考えます。飛び交う情報を鵜呑みにせず、自分で考え、調べ、自らの視点を見極め発信していくことがメディア社会で求められる姿勢です。さらに、この姿勢はメディアとの接し方だけでなく、自らの生き方そのものへ敷衍できるものだと思います。つまり、個人一人ひとりができることを、矜持をもって、できる限り行動することに勝るものはないということ、それが（田中さんがおっしゃっていた）生活の質を高めることにもなるのではないかと捉えました。

「微力だけど、無力じゃない」という言葉からは、選挙における一票もイメージされます。個人の小さな行動に力を与えてくれる言葉です。そして、個人の日々の行動の積み重が社会を動かす原動力であるということへ導いてくれる言葉でもあると思います。「自分で考え、そして行動をする」ことが如何に尊く賢く確かであるか。私は、このことを田中さんからのメッセージとして受け取りました。

（国際日本学部特任教授 原 良枝）

「講演から受け取ったメッセージ」世界の流行に価値を探すより、自分の中にある価値を追求する」田中氏の講演は、学部・学科の教員や学生にとつてとても大切な話でした。現社会では、グローバ

ル化の中で様々な場面から一人ひとりが圧力を感じています。この15～20年で、社会のトレンド、グローバル化、そしてソーシャルメディアのタレントのフォロワーになるために、圧力は前より強くなっています。この圧力に屈すれば、グローバルやバーチャルコミュニティの中で心地よさを感じられます。但し、自分自身、そうして自分の家族、自分が育てられたコミュニティにとつては何か真実であるかを失う危険にさらされています。また、流行を追うことで、自分と自分の貢献できることを忘れる可能性があります。グローバル市場やトレンドと比較すると、一人ひとりや地方のコミュニティが貢献できることは少ないかもしれません。然しながら、その中の宝物は、株式市場におけるどの証券の価値よりもはるかに大きいのです。そのために、個人のアイデンティティを大切し、保護する必要があります。

田中氏の講演の中で軽井沢、パリ、小布施町の話には深く共鳴しました。パリのパン屋さんの話を聞いた時に、自分の少年時代にパリに住んだ時のことを思い出しました。朝ごはんとして食べた、近所のパン屋さんの焼きたてで暖かいフランスパンの味や幸福感が思い出されます。フランスの作家、ブルースト、のマドレーヌのように、そのフランスパンの味から色々な思い出が生まれてきます。考えて見れば、約半世紀前に味わったローカルな味が思い出せるときに、国境を越えて、絆（もう少し現代的な表現を使えば、コネクティビティ）が感じられます。おそらく、小布施町を尋

る旅行者はその伝統的な環境で見る風景やそこで体験することによって、自分の子供時代の思い出が頭によみがえることでしょう。「グローバル化」か「ローカル化」の選択より、ローカルの価値を重視すると「グローバル」社会からの評価を得ることが出来ます。また、地域が独自の文化の固有の価値を保護できれば、地域住民は訪問者や他の部外者に対等な条件で向き合うことができます。個人のレベルに言い換えれば、世界の流行をフォローしながら価値を探すより、自分の中にある価値を追求すれば、いつでもどこでも自信をもって世界に向き合えると思いました。

（国際日本学部・国際文化交流学科教授
イトン チャーチル）